

「農業に魅せられて」

…その4

養鶏農家(東川町)

新田 みゆき

この冬一番といわれるほど厳しく冷え込んだ朝、私たちが暮らす上川郡東川町の最低気温はマイナス二六度を下回りました。北海道生まれの私もこんな日は外に出るのがおっくうになります。大切な鶏たちが待つているのでグズグズしてはられません。「よし、やるぞ!」と気合を入れて玄関のドアを開けました。

外は、キーンと凍れた(しばれた)空気が澄みわたり、まっ白に雪化粧した田畑と蒼く澄んだ冬の空に、大雪山連峰の最高峰・旭岳が美しく映えます。厳しい寒さの中、どっしりとそびえ立つ旭岳は、春の息吹を静かに待つ田畑たちを見守っているようです。

◆伏流水のある暮らし

夫と娘は、昨年春から夫の研修先の東川町で生活していましたが、私と鶏たち、そして番犬二匹も、昨年九月末に引越しを済ませ、我が家の生活と生産の拠点をすべて東川町へと移すことができました。

ご存知の方が多いかもしれませんが、東川町は北海道内で唯一、上水道がない町です。旭岳に降った雪や雨をゆつくりと森林が吸収し、百年ほどの歳月を経た伏流水のめぐみを受け、飲料水や農業用水に使っているそうです。

地域の自然環境が長い年月をかけて育んだ豊富な水源のめぐみを受けて、生活したり、生産活動が出来たりすることは、私たちが東川町に移住したいと



新田みゆき(につた みゆき)さん

1964年 稚内市生まれ

1997年 稚内市上勇知にて養鶏業開始

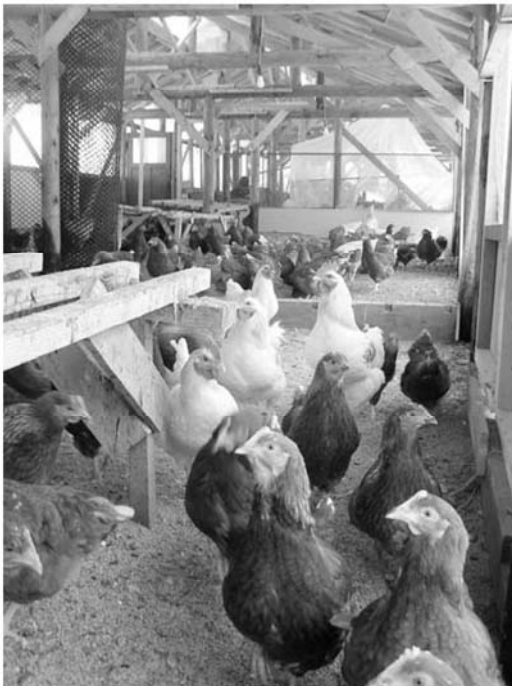
2007年9月 東川町に移転

夫 由 憲(42歳) 拓殖大学北海道短期
大学環境農学科新規
就農コース在学中

長男 美 春(高1)

長女 み の り (小6)

2 ha の農地を所有し、平飼にて鶏250羽を
飼育



寒さに負けず、元気な我が家の鶏たち

思った理由のひとつでした。もちろん、人間のみでなく、現在、我が家で飼養している、大すう、中ビナ合わせて五〇〇羽を超える鶏たちにも、ミネラルたっぷりの東川の伏流水を与えています。

◆農業と水

私たちが豊かで良質な地下水

にめぐまれている東川町で暮らしたいと思ったのは、数年前に友人に薦められて「地球白書」を読んだことがきっかけです。普段、なにげなく飲んだり使ったりしている水ですが、私たちが生きてゆくためにはなくてはならないものです。文化的な生活を営むための生活全般のみでなく、農業や工業などの



田植え前に除草作業をする佐竹さん

活動にも水は不可欠です。私たち人間のみでなく、すべての生き物にとって、水は代用のきかない大切な資源であるといわれています。

けれども、私にとって「水が

あること」はあまりに当たりマエで、その大切さを忘れてしまいがちでした。そして、「地球白書」を読む前の私は、水問題という点、「飲み水」の不足や水質の問題などのことだと思っ

ていました。

でも、本を読んで、そう

したことは問題の一片であつて、地球の上では、水をめぐってさまざまな問題や紛争が起きていることを知り、強い不安を感じました。

人が飲み水として利用す

る水資源の量は、全体から見るとわずかですが、例えば、日本で一キロの米を生産するためにはその三六〇〇倍、鶏肉一キロを生産するためにはその四五〇〇倍の水が必要と試算されています。日本での水の総使用量のうち、農業用水は約三分の二を占めているそうです。

もちろん、作物の種類や耕作条件、その年の気象条件などによつて、必要な水量は違つてくるでしょう。でも、私たち人間が利用できるのは、地球上の水のごく一部（〇・〇二五％）ともいわれていて、限りがあり、無尽蔵ではないようです。

こうした農業と水の関係をあらわすデータは、私たちがアタリマエのように口にかけている食

ことや、農業と環境のつながりの大切さを気づかせてくれたと思つていきます。

さて、地球規模の話はそろそろこの辺にして、私たちの足元である東川町での暮らしぶりに話題を戻します。

◆ いろんな生き物が暮らせる技術

拓殖大学北海道短期大学・新規就農コースに在学中の夫が、稲作の有機栽培技術を身につけたいと、昨年春から東川町で稲作を営む佐竹農園にお世話になっていきます。

佐竹さんは、幼いころアレルギー疾患のあつた息子さんの為に作った無農薬有機栽培の一枚の田んぼをきっかけに、東川町で二十年余にわたつて、お米の有機栽培を続けてこられた方で

す。今ではその息子さんと一緒に、約一〇町歩の水田を有機栽培と特別栽培で作っていらっしやいます。

有機認証の水田以外にもほとんど化学肥料を使わず、除草剤も

ヒエ対策のための一回のみ。また、除草剤による畦の除草も行わず、ハーブや在来の草をはやして害虫管理を行っているそうです。

夫は、除草剤は使わずに数反

の畑を作った

経験はありま

すが、水田で

の無除草剤は

初めて。夫い

わく「除草剤

を一回使用す

れば、特殊な

機械も、たく

さんの時間も

使わなくて済

むんや。ほん

でも、薬を使

わないことで

いろんな生き

物が暮らして

いける水田を作ろうと、二十年間も格闘している佐竹さんはカツコええで。有機栽培は、やつぱおもしろいで〜」とのこと。一緒に作業をさせてもらい、その技術や作業に奥深さを感じて、ますます有機栽培に惹かれた様子でした。

アイガモ除草や深水管理、機械、人力の除草でも残るヒエに負けずに育った佐竹さんのお米は、「噛めば噛むほど旨みがある」とか「ご飯だけでもおいしい！」と、私たちの友人知人からたくさんのお好評を寄せられました。中には、「これを食べたら、もう、ほかのお米は食べられない」といつて、佐竹さんの有機認証米に米チェンした友人もいます。

私たちが自分の水田を持つ日はまだまだ先になりそうですが、

佐竹農園で多くの生き物が暮らせる技術を学ばせてもらいながら、地域循環型の農業経営を目指してゆきたいと思っています。

◆小さな農業の生き残りをかけて

東川町へと移転して養鶏業を開始した我が家ですが、小さな小さな舟で、飼料や資材の高騰の大波が押し寄せる海原へと出航したようなものです。

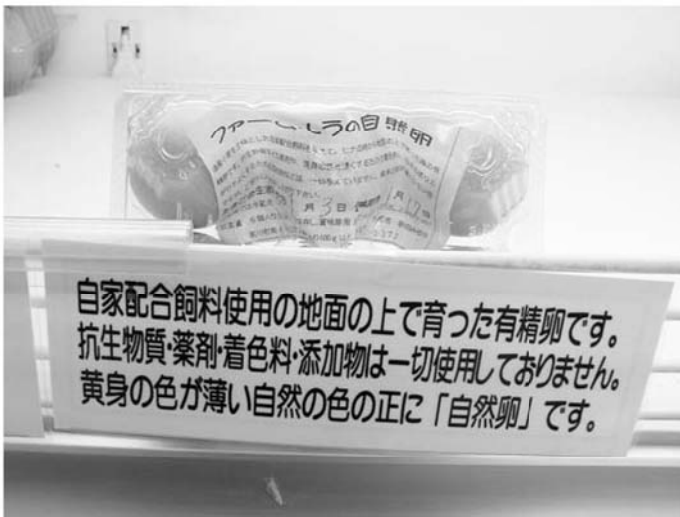
ものすごい航海（後悔ではありません）になりそうですが、農業に魅せられた私たちが自ら選んだ道です。生き残りをかけて、一生懸命働いて、工夫して、勉強していかなくちや〜と、今いっそう気を引き締めています。意気込みは一人前で鼻息は荒いけど、まだまだたよりのない移住者の私たちを気にかけてくだ



合鴨農法の主役たち



北の住まい設計社ショップの様子



ホクレン 東川店では生産情報が表示されている

「さつたのか、米糠やお米の等外品、そして野菜のハネ品など、生産過程の副産物を、「鶏のエサになるなら、取りにおいで」と声をかけてくれる農家さんが、一軒、また一軒と増えてきました。本当にありがたいことです。

そして、東川町での販売は、ホクレンショップひがしかわ店

さんと北の住まい設計社さんの店舗やカフェでも、我が家の卵をお取り扱いしてくださることになりました。

たくさんの方から寄せられた「おいしいよ」「安心して食べたいよ」「がんばって」という温かなご声援を励みにしながら、

これからも農業という道を、ゆつくりしつかり歩んで行きた

いと思っています。

最後になりましたが、一年間、拙文にお付き合いいただきました方々に、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。